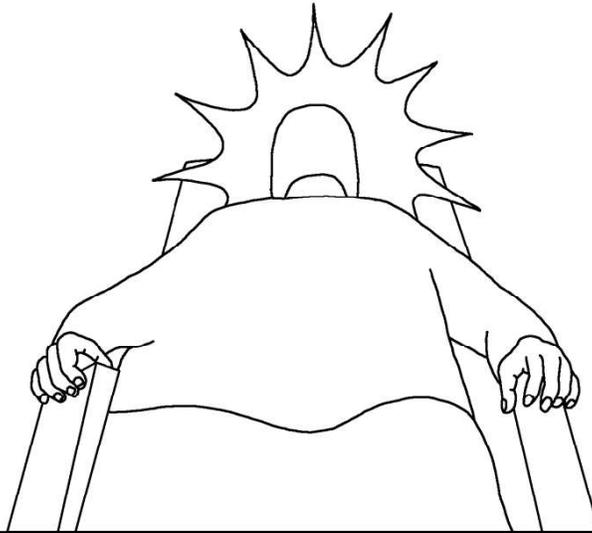


こども  
子供のインターネットバイブル  
案内いたします

しゃ  
よげん者、イザヤ



ぶん  
文: Edward Hughes  
え  
絵: Jonathan Hay; Alastair Paterson  
かいさくしゃ  
改作者: Mary-Anne S.  
ほんやくしゃ  
翻訳者: Yuko Kajiki  
監修者: Dan Ellrick  
しゅつばんしゃ  
出版社: Bible for Children  
www.M1914.org

BFC  
PO Box 3  
Winnipeg, MB R3C 2G1  
Canada

©2022 Bible for Children, Inc.

許可: 他人に売らない限り このお話のコピー、又はプリントは、許可されています。

1

しゃ  
イザヤは、よげん者でしたよ。さて、よげん者ってどんなしごとをするのでしょ  
う。それはね、神さまの言われていることを、人々におはなしするしごとなので  
す。そのころの人々は、

かみ  
いつも神さまのこ  
とばにしたがっ  
て生きていたわ  
けではありません  
でした。



2

でもイザヤは、<sup>かみ</sup>けってして<sup>おん</sup>神さまが<sup>くに</sup>がっかりさせませんでしたよ。なぜって、<sup>にん</sup>4人の<sup>おん</sup>王さまが<sup>おん</sup>つぎつぎにこの国をおさめていたあいだ、イザヤはずっと神さまのこ

<sup>おし</sup>とばを、みんなに教え<sup>おん</sup>つつけていたのです。ウジヤ王の<sup>じだい</sup>時代から、ヨタム<sup>おん</sup>王、アハズ王、へゼ<sup>おん</sup>キア王の<sup>じだい</sup>時代までね。



3

ウジヤ王は、エルサレムの町にあるユダの土地の王さまでした。神さまは、はじめウジヤ王をとて祝<sup>おん</sup>ふくされていきました。どうしてって、ウジヤ王は、<sup>かみ</sup>神さまが<sup>おん</sup>ごらんになり、「よし」と言われる<sup>ただ</sup>正しいことをしたからです。でもね、ウジヤ王は、<sup>おん</sup>だんだん<sup>おん</sup>いばるようになり、神さまにしたがうのを、<sup>おん</sup>やめてしまったのです。かれは<sup>おん</sup>らい病<sup>おん</sup>になって、死ぬまで一人ぼっち<sup>おん</sup>で<sup>おん</sup>生きなければなりませんでした。



4

ウジヤ王は、60年以上も王さまでした。そのウジヤ王が亡<sup>おん</sup>くなって、つぎに、<sup>おん</sup>かれの<sup>おん</sup>むすこ<sup>おん</sup>ヨタムが、この王となりました。ヨタムは17年のあいだ、王<sup>おん</sup>さま<sup>おん</sup>でした。神さまは、ヨタム王をとて祝<sup>おん</sup>ふくしてくださいました。なぜなら、ヨタム王は、<sup>おん</sup>神さまの<sup>おん</sup>ことば<sup>おん</sup>を伝えるイザヤや、ほかのよげん<sup>おん</sup>者<sup>おん</sup>のはなしをよく聞いて、そのとおりにしたからです。



5

ヨタムのむすこは、アハズといます。アハズは、20さいでこの国の王さまと<sup>おん</sup>なり、エルサレムで16年間、王<sup>おん</sup>さま<sup>おん</sup>でした。アハズはね、神さまのことば<sup>おん</sup>など、まったく<sup>おん</sup>聞き<sup>おん</sup>ませんでした。それどころか、ぐう像<sup>おん</sup>やほかのま<sup>おん</sup>ちがった<sup>おん</sup>神<sup>おん</sup>さま<sup>おん</sup>を<sup>おん</sup>礼<sup>おん</sup>拝<sup>おん</sup>して<sup>おん</sup>いました。そして、<sup>おん</sup>た<sup>おん</sup>く<sup>おん</sup>さん<sup>おん</sup>の<sup>おん</sup>イス<sup>おん</sup>ラエル<sup>おん</sup>の人<sup>おん</sup>々に、自分と<sup>おん</sup>同<sup>おん</sup>じ<sup>おん</sup>ように、<sup>おん</sup>ま<sup>おん</sup>ち<sup>おん</sup>が<sup>おん</sup>つ<sup>おん</sup>た<sup>おん</sup>礼<sup>おん</sup>拝<sup>おん</sup>をするように<sup>おん</sup>言<sup>おん</sup>った<sup>おん</sup>のです。もちろんイザヤ<sup>おん</sup>は、<sup>おん</sup>なん<sup>おん</sup>ども<sup>おん</sup>言<sup>おん</sup>い<sup>おん</sup>ました。「あなた<sup>おん</sup>の<sup>おん</sup>し<sup>おん</sup>て<sup>おん</sup>い<sup>おん</sup>る<sup>おん</sup>こ<sup>おん</sup>とは、<sup>おん</sup>ま<sup>おん</sup>ち<sup>おん</sup>が<sup>おん</sup>つ<sup>おん</sup>て<sup>おん</sup>い<sup>おん</sup>ます。」<sup>おん</sup>って<sup>おん</sup>ね。でも、<sup>おん</sup>アハズ<sup>おん</sup>は、<sup>おん</sup>神<sup>おん</sup>さま<sup>おん</sup>か<sup>おん</sup>ら<sup>おん</sup>の<sup>おん</sup>注<sup>おん</sup>意<sup>おん</sup>など、<sup>おん</sup>ど<sup>おん</sup>う<sup>おん</sup>も<sup>おん</sup>よ<sup>おん</sup>か<sup>おん</sup>つ<sup>おん</sup>た<sup>おん</sup>の<sup>おん</sup>で<sup>おん</sup>す。アハズ<sup>おん</sup>は、<sup>おん</sup>た<sup>おん</sup>つ<sup>おん</sup>た<sup>おん</sup>35<sup>おん</sup>さい<sup>おん</sup>の<sup>おん</sup>わ<sup>おん</sup>か<sup>おん</sup>さ<sup>おん</sup>で、<sup>おん</sup>亡<sup>おん</sup>く<sup>おん</sup>な<sup>おん</sup>つ<sup>おん</sup>て<sup>おん</sup>し<sup>おん</sup>ま<sup>おん</sup>い<sup>おん</sup>ました。



6

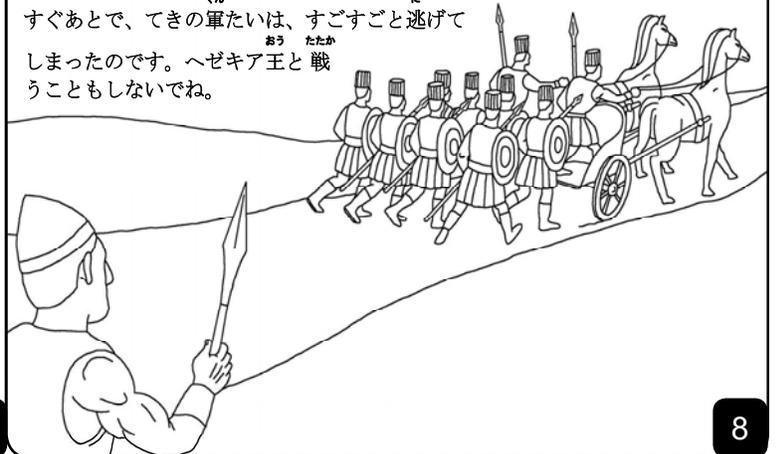
神さまは、つぎの王へゼキアをたいそう祝<sup>おん</sup>ふく<sup>おん</sup>なさいました。どうしてって、<sup>おん</sup>へゼ<sup>おん</sup>キア<sup>おん</sup>王<sup>おん</sup>は、<sup>おん</sup>ぐ<sup>おん</sup>う<sup>おん</sup>像<sup>おん</sup>や<sup>おん</sup>ま<sup>おん</sup>ち<sup>おん</sup>が<sup>おん</sup>つ<sup>おん</sup>た<sup>おん</sup>神<sup>おん</sup>々<sup>おん</sup>を<sup>おん</sup>み<sup>おん</sup>ん<sup>おん</sup>な<sup>おん</sup>す<sup>おん</sup>て<sup>おん</sup>し<sup>おん</sup>ま<sup>おん</sup>い、<sup>おん</sup>ほん<sup>おん</sup>と<sup>おん</sup>う<sup>おん</sup>の<sup>おん</sup>神<sup>おん</sup>さま<sup>おん</sup>に<sup>おん</sup>お<sup>おん</sup>祈<sup>おん</sup>り<sup>おん</sup>し<sup>おん</sup>た<sup>おん</sup>か<sup>おん</sup>ら<sup>おん</sup>で<sup>おん</sup>す。て<sup>おん</sup>き<sup>おん</sup>の<sup>おん</sup>軍<sup>おん</sup>たい<sup>おん</sup>が、<sup>おん</sup>ユ<sup>おん</sup>ダ<sup>おん</sup>を<sup>おん</sup>攻<sup>おん</sup>め<sup>おん</sup>て<sup>おん</sup>き<sup>おん</sup>た<sup>おん</sup>と<sup>おん</sup>き<sup>おん</sup>で<sup>おん</sup>す。へ<sup>おん</sup>ゼ<sup>おん</sup>キ<sup>おん</sup>ア<sup>おん</sup>は、<sup>おん</sup>自<sup>おん</sup>分<sup>おん</sup>の<sup>おん</sup>軍<sup>おん</sup>たい<sup>おん</sup>が<sup>おん</sup>と<sup>おん</sup>て<sup>おん</sup>も<sup>おん</sup>よ<sup>おん</sup>わ<sup>おん</sup>く、<sup>おん</sup>勝<sup>おん</sup>て<sup>おん</sup>そ<sup>おん</sup>う<sup>おん</sup>も<sup>おん</sup>な<sup>おん</sup>い<sup>おん</sup>こ<sup>おん</sup>と<sup>おん</sup>が<sup>おん</sup>よ<sup>おん</sup>く<sup>おん</sup>わ<sup>おん</sup>か<sup>おん</sup>つ<sup>おん</sup>て<sup>おん</sup>い<sup>おん</sup>ま<sup>おん</sup>し<sup>おん</sup>た<sup>おん</sup>。へ<sup>おん</sup>ゼ<sup>おん</sup>キ<sup>おん</sup>ア<sup>おん</sup>は<sup>おん</sup>イ<sup>おん</sup>ザ<sup>おん</sup>ヤ<sup>おん</sup>に、<sup>おん</sup>こ<sup>おん</sup>う<sup>おん</sup>た<sup>おん</sup>の<sup>おん</sup>み<sup>おん</sup>ま<sup>おん</sup>し<sup>おん</sup>た<sup>おん</sup>。

「イザヤ先生、どうか神さまに、わたしたちを助<sup>おん</sup>け<sup>おん</sup>て<sup>おん</sup>く<sup>おん</sup>だ<sup>おん</sup>さ<sup>おん</sup>る<sup>おん</sup>よ<sup>おん</sup>う<sup>おん</sup>お<sup>おん</sup>祈<sup>おん</sup>り<sup>おん</sup>し<sup>おん</sup>て<sup>おん</sup>く<sup>おん</sup>だ<sup>おん</sup>さ<sup>おん</sup>い。」<sup>おん</sup>って<sup>おん</sup>ね。

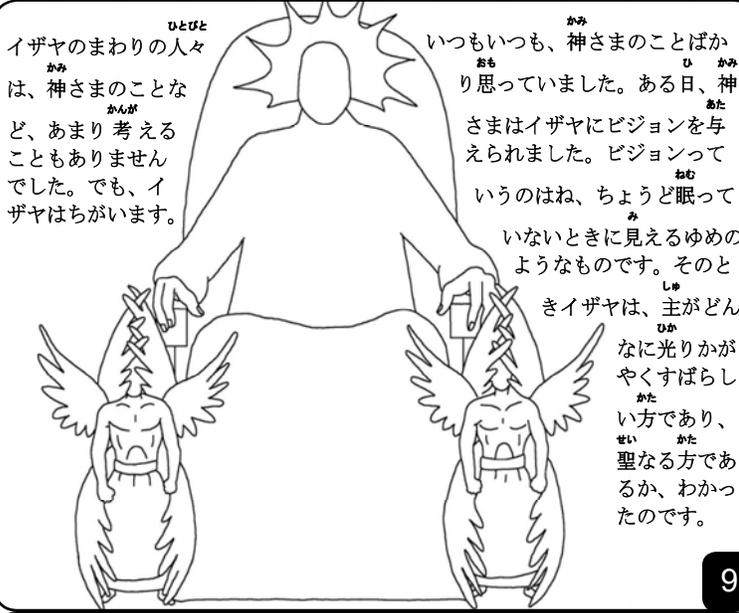


7

そこでイザヤは、このようなことばを、王につたえました。「へゼキア王よ、<sup>おん</sup>こ<sup>おん</sup>れ<sup>おん</sup>は、<sup>おん</sup>神<sup>おん</sup>さま<sup>おん</sup>が<sup>おん</sup>言<sup>おん</sup>わ<sup>おん</sup>れ<sup>おん</sup>て<sup>おん</sup>い<sup>おん</sup>る<sup>おん</sup>こ<sup>おん</sup>と<sup>おん</sup>で<sup>おん</sup>あ<sup>おん</sup>る<sup>おん</sup>。て<sup>おん</sup>き<sup>おん</sup>の<sup>おん</sup>軍<sup>おん</sup>たい<sup>おん</sup>を、<sup>おん</sup>け<sup>おん</sup>つ<sup>おん</sup>て<sup>おん</sup>お<sup>おん</sup>そ<sup>おん</sup>れ<sup>おん</sup>る<sup>おん</sup>こ<sup>おん</sup>と<sup>おん</sup>は<sup>おん</sup>な<sup>おん</sup>い<sup>おん</sup>。わ<sup>おん</sup>た<sup>おん</sup>し<sup>おん</sup>が<sup>おん</sup>、<sup>おん</sup>て<sup>おん</sup>き<sup>おん</sup>を<sup>おん</sup>負<sup>おん</sup>か<sup>おん</sup>し<sup>おん</sup>て<sup>おん</sup>し<sup>おん</sup>ま<sup>おん</sup>お<sup>おん</sup>う<sup>おん</sup>！」<sup>おん</sup>神<sup>おん</sup>さま<sup>おん</sup>が<sup>おん</sup>こ<sup>おん</sup>れ<sup>おん</sup>を<sup>おん</sup>言<sup>おん</sup>わ<sup>おん</sup>れ<sup>おん</sup>た<sup>おん</sup>す<sup>おん</sup>ぐ<sup>おん</sup>あ<sup>おん</sup>と<sup>おん</sup>で、<sup>おん</sup>て<sup>おん</sup>き<sup>おん</sup>の<sup>おん</sup>軍<sup>おん</sup>たい<sup>おん</sup>は、<sup>おん</sup>す<sup>おん</sup>ぐ<sup>おん</sup>す<sup>おん</sup>ぐ<sup>おん</sup>と<sup>おん</sup>逃<sup>おん</sup>げ<sup>おん</sup>て<sup>おん</sup>し<sup>おん</sup>ま<sup>おん</sup>つ<sup>おん</sup>た<sup>おん</sup>の<sup>おん</sup>で<sup>おん</sup>す。へ<sup>おん</sup>ゼ<sup>おん</sup>キ<sup>おん</sup>ア<sup>おん</sup>王<sup>おん</sup>と<sup>おん</sup>戦<sup>おん</sup>う<sup>おん</sup>こ<sup>おん</sup>と<sup>おん</sup>も<sup>おん</sup>し<sup>おん</sup>な<sup>おん</sup>い<sup>おん</sup>で<sup>おん</sup>ね。



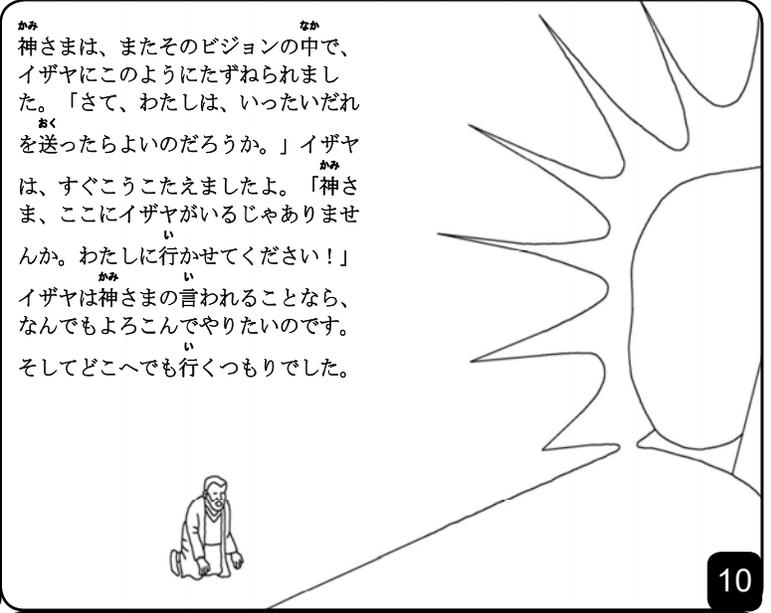
8



いとびと  
イザヤのまわりの人々  
かみ  
は、神さまのこな  
かんが  
ど、あまり考える  
こともありません  
でした。でも、イ  
ザヤはちがいます。

かみ  
いつもいつも、神さまのことばか  
おも  
り思っていました。ある日、神  
さまはイザヤにビジョンを  
あた  
えられました。ビジョンって  
い  
うのはね、ちょうど眠って  
い  
ないときに見えるゆめの  
よ  
うなものです。そのと  
し  
きイザヤは、主がどん  
な  
に光りかが  
やくすばらし  
か  
い方であり、  
せい  
聖なる方であ  
るか、わかつ  
たのです。

9



かみ  
神さまは、またそのビジョンの中で、  
イザヤにこのようにたずねられまし  
た。「さて、わたしは、いったいだれ  
をおく  
を送ったらよいのだろうか。」イザヤ  
かみ  
は、すぐこうこたえましたよ。「神さ  
ま、ここにイザヤがいるじゃありませ  
んか。わたしに行かせてください！」  
イザヤは神さまの言われることなら、  
なんでもよろこんでやりたいのです。  
い  
そしてどこへでも行くつもりでした。

10



おも  
イザヤは、こう思いましたよ。「もしかしたら神さまは、わたしをと  
お  
く  
い  
いとおい国に住んでいる人々のところへ、行かせてくださるの  
か  
も  
し  
れない。神さまのことを、まだ聞いたこともない人々のところへね。」

11



かみ  
でもね、そうじゃなかったのですよ。神さまは、神さまの国に住ん  
かみ  
でいる神さまの民に、話しをするようにいわれたのです。イザヤ  
く  
は、ここの国の人々に「神さまは、あなたたちの罪を、おこっ  
す  
てい  
らっしゃる。」と、言わなければなりませんでした。

12



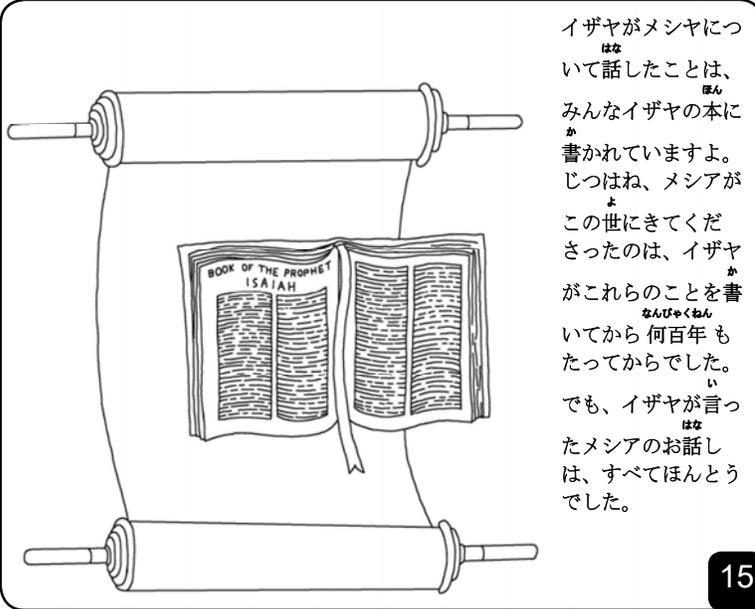
ほか  
いとびと  
つた  
イザヤは、この他に人々にどうしても伝えなければならないことがありまし  
た  
よ。それって、とてもすばらしいことだったので。それはね、「いつか、わた  
し  
たちを助けてくださるつよいお方が、やって来られるだろう。そのお方は、わ  
た  
したたちのすべての敵と罪からすくって  
く  
だ  
さ  
る  
だ  
ら  
う。」  
と  
い  
う  
こ  
と  
で  
し  
た。

13



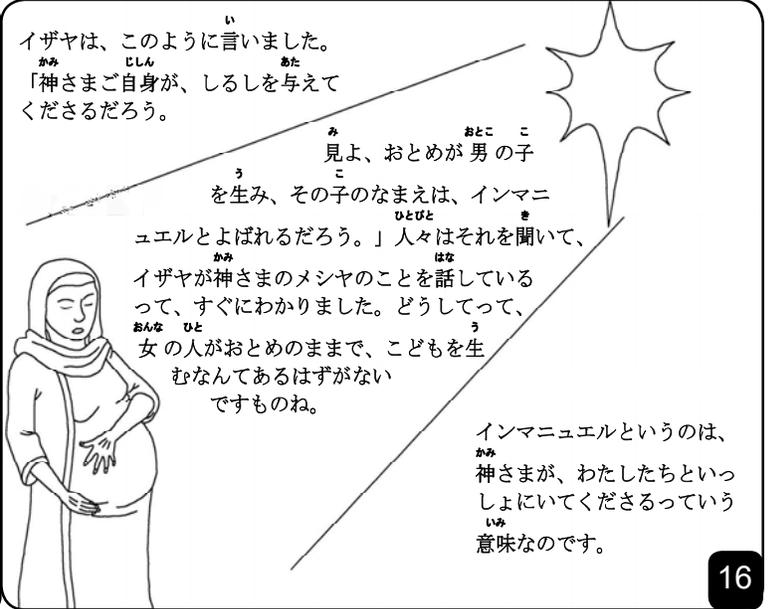
いとびと  
ユダヤの人々は、このお方のことを、メシアと呼んでいました。ほんとうはね、  
か  
ユダヤの人たちは、神さまがメシアをおく  
か  
て  
く  
だ  
さ  
る  
て  
わ  
か  
つ  
て  
い  
た  
の  
で  
す。  
お  
お  
でもね、多くの人たちは、「メシアが来られるのは、まだまだ先のことだ。」つ  
い  
て  
言  
っ  
て  
、  
好  
き  
か  
つ  
て  
な  
い  
こ  
と  
を  
し  
て  
生  
き  
て  
い  
ま  
し  
た。

14



イザヤがメシヤにつ  
いて話したことは、  
みんなイザヤの本に  
書かれていますよ。  
じつはね、メシアが  
この世にきてくだ  
さったのは、イザヤ  
がこれらのことを書  
いてから何百年も  
たってからでした。  
でも、イザヤが言っ  
たメシアのお話し  
は、すべてほんとう  
でした。

15

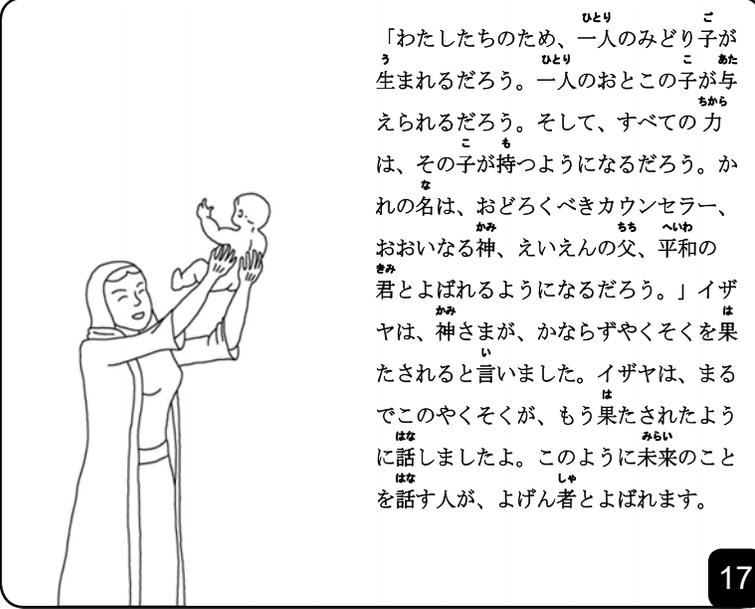


イザヤは、このように言いました。  
「神さまご自身が、しるしを与えて  
くださるだろう。」

見よ、おとめが男の子  
を生み、その子のなまえは、インマニ  
ユエルとよばれるだろう。」人々はそれを聞いて、  
イザヤが神さまのメシヤのことを話している  
って、すぐにわかりました。どうしてって、  
女の人がおとめのままで、こどもを生  
むなんてあるはずがない  
ですものね。

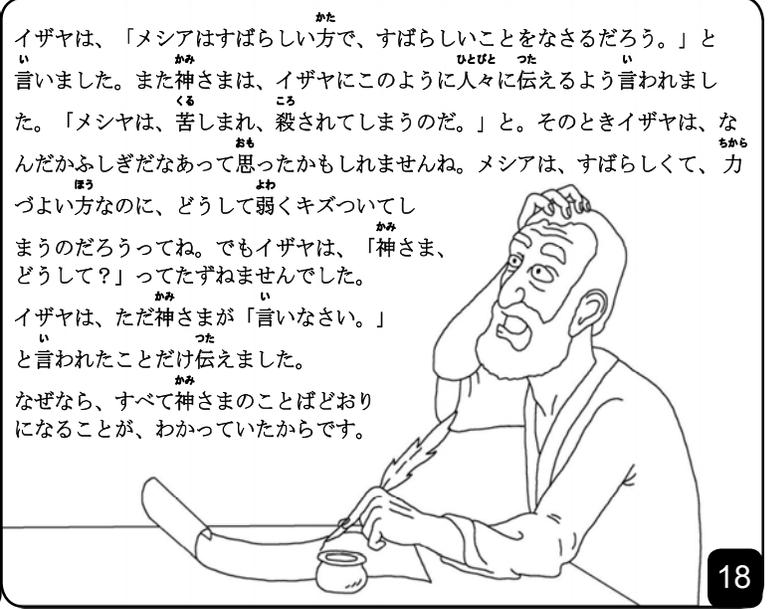
インマニユエルというのは、  
神さまが、わたしたちといっ  
しょにいてくださるっていう  
意味なのです。

16



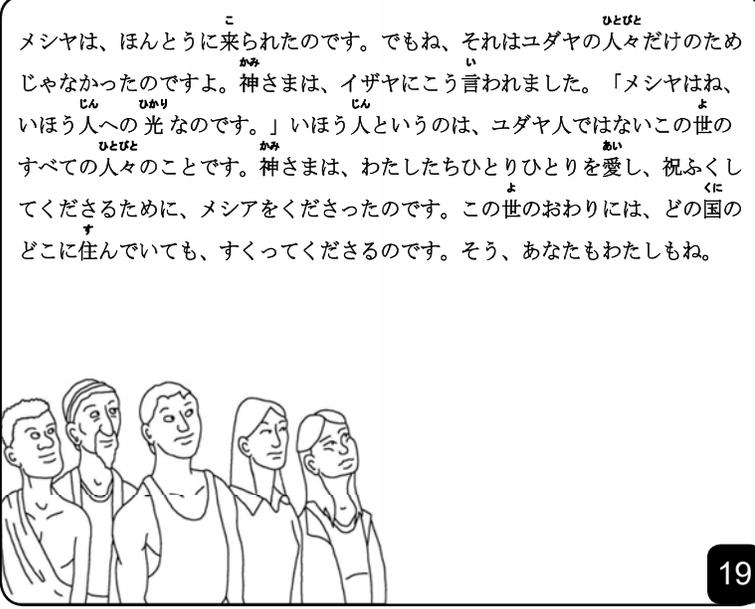
「わたしたちのため、一人のみどり子が  
生まれるだろう。一人のおとこの子が与  
えられるだろう。そして、すべての力  
は、その子が持つようになるだろう。か  
れの名は、おどろくべきカウンセラー、  
おおいなる神、えいえんの父、平和の  
君とよばれるようになるだろう。」イザ  
ヤは、神さまが、かならずやくそくを果  
たされると言いました。イザヤは、まる  
でこのやくそくが、もう果たされたよう  
に話しましたよ。このように未来のこと  
を話す人が、よげん者とよべれます。

17



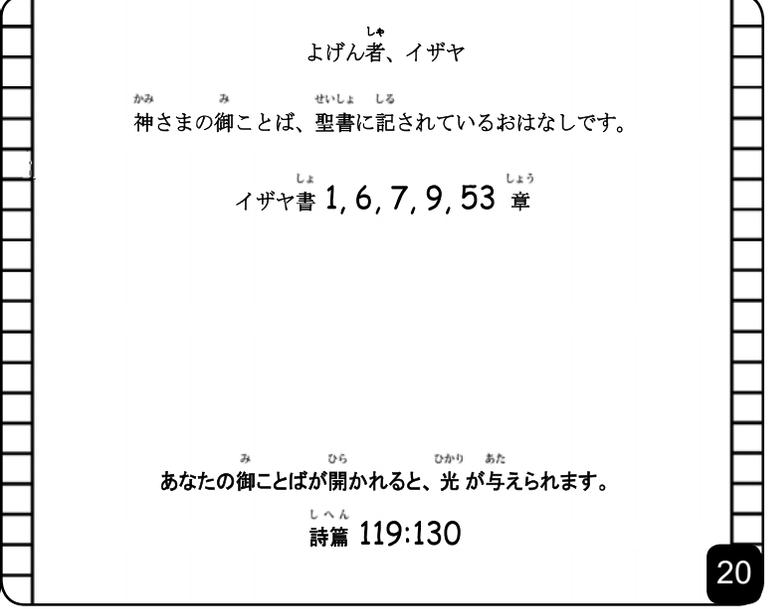
イザヤは、「メシアは素晴らしい方で、素晴らしいことをなさるだろう。」と  
言いました。また神さまは、イザヤにこのように人々に伝えるよう言われまし  
た。「メシアは、苦しまれ、殺されてしまうのだ。」と。そのときイザヤは、なん  
だかふしぎだなあって思ったかもしれませんね。メシアは、すばらしくて、力  
づよい方なのに、どうして弱くキズついてし  
まうのだろうか。でもイザヤは、「神さま、  
どうして？」ってたずねませんでした。  
イザヤは、ただ神さまが「言いなさい。」  
と言われたことだけ伝えました。  
なぜなら、すべて神さまのことばどおり  
になることが、わかっていたからです。

18



メシヤは、ほんとうに來られたのです。でもね、それはユダヤの人々だけのため  
じゃなかったのですよ。神さまは、イザヤにこう言われました。「メシヤはね、  
いほう人への光なのです。」いほう人というのは、ユダヤ人ではないこの世の  
すべての人々のことです。神さまは、わたしたちひとりひとりを愛し、祝ふくし  
てくださるために、メシアをくださったのです。この世のおわりには、どの国の  
どこに住んでいても、すくってくださるのです。そう、あなたもわたしもね。

19



よげん者、イザヤ  
神さまの御ことば、聖書に記されているおはなしです。

イザヤ書 1, 6, 7, 9, 53 章

あなたの御ことばが開かれると、光が与えられます。

詩篇 119:130

20

おわり

27



60

21

この聖書物語は、私たちをつくってくださったすばらしい神さまについて、おはなしています。神さまは、あなたが、神さまのことをしてほしいと、思っています。

神さまは、私たちが、よくないことをしてしまったことを、していらっしやいます。

それを、神さまは、罪とよばれています。その罪のむくい、死です。

けれども、神さまは、あなたをとて愛していらっしやいますので、ただ一人のみ子イエスさまを、この世に送って下さいました。そしてあなたの罪のために、十字架で亡くなられたのです。

けれどもそれから、イエスさまはよみがえられ、天国のいえへ、もどられたのです。もし、あなたがイエスさまを信じ、ゆるしてくださいとおねがいするなら、イエスさまは、ゆるして下さいます！イエスさまは、今、あなたの所へ来て、あなたのところの中に住んで下さいます。そして、いつまでもイエスさまといっしょに生きることができますよ。

もし、あなたが、これがほんとうだと信じるなら、神さまにこう言って下さい。愛する神さま、私は、あなたが神さまと信じます。あなたは人となり、私たちの罪のために亡く

なってくださいました。そして、よみがえって、いま生きていらっしやいます。どうか、私のところの中に来て、罪をゆるしてください。それで、私は今、あたらしい命をいただけます。そして、いつか、あなたの所へ行き、いつまでもあなたといっしょに生きることができます。あなたにしたがえますよう、あなたの子として生きることができますよう、たすけて下さい。アーメン

まいにち、聖書をよみ、神さまとおはなししましょう！ヨハネによる福音書3：16

22